むらの写真先生

熊谷　元一

むらの写真先生

熊谷　元一

家の光協会

〔著者略歴〕

明治四十二年長野県に生まる。昭和四年飯田中学校卒業。郷里の小学校に勤務するかたわら童画を描く。昭和十四年より拓務省、大東亜省の嘱託となり、二十年より再び郷里の小学校で教職につき、四十一年退職現在に至る。主な著書、記録写真『会地村』『かいとの村』『農村の婦人』『一年生』『農家の四季』絵本『あの村この村』『ヤマノムラ』『わらべうた』、郷土誌『伊賀良』、研究調査書『村の婦人生活』など。写真集『一年生』で第一回毎日写真賞を受く。

むらの写真先生

定価五百円

昭和四十三年十月三日　第一版

著者　熊谷元一（くまがい もといち）

発行者　奥原潔

発行所　家の光協会

東京都新宿区市谷船河町十一

電話／東京(260)三一五一(代表)

振替／東京　四七二四

郵便番号　一六二

印刷　凸版印刷株式会社

製本　寿製本株式会社

乱丁本、落丁本はおとりかえいたします。

© 1968 Motoichi Kumagai

むらの写真先生／目次

まえがきにかえて　5
写真先生三十年……11
写らなかった写真　12
やっと手にはいったカメラ　18
村誌を思いたつ　22
さんざんなごちそう　28
『会地村』の出版　32
結婚記念写真　38
一枚の写真で国の予算を得る　44
『かいこの村』の出版　48
老眼鏡をかけたカメラ　54
一年生　58
黒板絵――チョーク画　68
農家の一年　74
星は電気で光るのか　82
はじめて映画を見たこども　90
教え子のこと……95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

特　技　96
こどもの姿を記録して残す　104
親子の詩　112
たのしい絵日記　124
いのちはどこにあるか　128
こどもを鍛える　134
コンクールばやり　142
背たけだけ本を読む　150
ごほうびの写真　160
失敗をくり返して　166
教室でなくなったお金　174
森の水車　182
気がねと教育　188
評価について　194
村で暮らして……209
こども向けの郷土出版　210
村絵師　216

虫封じ 222
農休日はまだ早い 228
お手のくぼ 236
当番だけの村祭り 242
二十六対七 248
だるま貯金 252
主婦の季節労働 258
学校と農協 266
蛙の声 270
縁先でおしっこ 274
区の珍選挙 278
実家に帰りたがる嫁 282
農家の書画 288
風呂桶の底がぬけた話 296
あとがき 300

装丁・挿絵・写真　熊谷元一
編集　松沢直義

まえがきにかえて

隣村の小学校へ転任になったとき先方の村の人たちが歓迎会を開いてくれた。その席でみんなが入れかわり立ちかわり、酒をすすめてくれた。わたしが「そのほうはあまりいけませんので」と、辞退すると、「なにいうんな、おじいさんは一升酒という評判だったし、おとうさんもずいぶんいけるそうじゃないかな、先生が飲めんちゅうなことはないに」と、むりやりにすすめられた。

父の酒好きはまだしも、祖父が大工で毎日一升ずつ酒を飲んだことまで知っているとは驚いた。わたしは戦後三つの小学校へあわせて二十一年間勤めたが、三校とも自分の家から歩いて三十分以内のところだった。

この話のように祖父の代のころからのことを知っている人もあるので、うかつなことはできないが、そのかわり、わたしのほうも村の人たちのことを知っているわけで、お互いに胸を張ってつきあわなくてもよいわけである。

長野県の伊那谷にある阿智村は、昭和三十一年に会地、伍和、智里の三村が合併してできた。村の中心に商店街があるほかは農家の多い村である。わたしは会地村で商店を経営しながら、かいこ

を飼っていた家に、明治の末に生まれた。先祖は代々ながくこの村に住んでいた。いわばはえぬきの村っ子である。

この村は山の中であるが、宿場町であった関係からか、明治のころから写真館があった。でも当時の村人は写真などめったにとらなかったようだ。それが大正十年ころすでに素人で写真をとる人が何人かできた。でもこのときはあまりさかんにならなかった。

昭和十年ころになって再び村で素人の写真熱が高まった。十数名の会員がクラブをつくって、毎月作品をもちよって研究会を開いていた。わたしは写真はやらなかったが、当事家事を手伝いながら童画の勉強をしていたので、なにか参考になるかもしれないと思って、月例会の仲間にしてもらい、写真を見せてもらった。

なかには大きく伸ばした作品もあって、よく素人でもこんなにとれるものだと感心した。そのうち村の友だちでもこんなにとれるくらいなら、わたしも写せるのではないかと思うようになった。それで村の写真館で小型カメラを借りて、写し方を教えてもらって写してみた。ところがこれはみごとに失敗してしまった。芸術写真どころか、はっきり写らなかった。ほかのカメラを借りてやってもだめで自分のカメラがほしくなった。

昭和十一年にやっと、当時いちばん安い十七円の国産カメラ「パーレット」の単玉を手に入れることができた。はずむ心で写してみると、これはどうだろう、借りたカメラとうってかわって、フ

ィルム一本のほとんどが、自分でもびっくりするほどはっきり写っていた。

そこでふと思いついたことがある。以前に自分の住む村の村誌をつくりたいと思って、手がけたことがあったが、非常に手間のかかる仕事でやむなく中止してしまった。これを写真でとってみたらということであった。はじめて写真がはっきり写るようになった素人が、まだ当時類のない写真で村誌をつくるなどは無謀なことであるが、なにはともあれやってみようと思って計画をたてた。まず実行と、カメラ雑誌を手がかりにして、時間のゆるすかぎり自転車で村内をまわり歩いて撮影をつづけた。

二か年間かかってどうにか村の写真帳を完成した。これがさいわい認められて、昭和十三年に朝日新聞社から『会地村』と題して出版してもらうことができた。ひょうたんから駒がでたようなものであった。

これが縁になり、昭和十四年から嘱託として拓務省に勤務することになった。その間満州開拓の写真をとったが、世間に発表するようなものはなかった。むしろ勉強していた童画を幼年雑誌や絵本に発表することができた。

戦争がはげしくなって、満州開拓の仕事はほとんどできなくなった。やむなく昭和二十年六月郷里に帰り、隣村である智里東青年学校に勤務するようになった。ところがまもなく召集を受け、四十日間熊本の連隊で軍隊生活をして、解除とともに再びもとの学校へもどり、戦後は小学校に勤め

るようになった。

当時は授業などほとんどせず、こどもたちを連れ、農家へ手伝いに出かけていた。戦時中の教育のことはあまり知らなかったが、今後は大きく変わるだろうと思っていた。ところが学校を視察に来た米兵が、とじこんであった新聞にのっていた天皇陛下の写真を見つけ、ビリビリと破いて捨てた。これを見てはっとし、教育も出直しだと痛感した。

まもなく、民主主義の教育が叫ばれ、六・三制が実施されたが、教師の多くはとまどっていた。それでなにはともあれ、教育の基礎として、自分たちの足もとの村をよく見て、その中で生活する人々のことを知ることがたいせつだと考えた。

それで、自分の組のこどもといっしょに、そのこどもたちの家の実態をいろいろの面から調べてみた。そしてこどもと最も関係の深い婦人たちのことをもっと知りたいと思うようになった。さいわい昭和二十三年に、農林省農業総合研究所の指導と援助を受けることができるようになった。

わたしはそのとき隣村から自分の村の小学校に移ったので、自分の村と前にいた村の婦人を対象にして調査をはじめた。それといっしょに写真もとった。両村ともわたしとは関係が深いわけで、婦人たちがとても協力的で、予期以上の結果を得ることができた。

これによって二十代、三十代の婦人の多くが家庭内で非常に気がねをしていることがわかった。ところがこの年代は、乳幼児のしつけと、小学校の教育のたいせつな時期で、こどもたちのために

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

も家庭の民主化をはからなければならないと思って、会合などのさいにこのことを訴えた。

また男子にくらべて婦人の労働のはげしいこともわかった。わたしは村の公民館の一部員でもあったので、公民館の仕事の一つとして農休日をとることを提案した。学校だけにとじこもらず、なにかと機会をつくって、村の人たちと親しく接することは教育の面でも役だった。

そのころ学校関係では、教職員の再教育のための講習会があいついで行なわれた。その結果昭和三十年にわたしははじめて小学校の正教員の資格を得た。ところが中学校時代の同年輩の友だちの中には六・三制の実施で各村に中学校ができたので、校長が急にふえ、若くて校長になったものが多かった。

こんなことから、どの校長も資格もなかったわたしの仕事に理解をもって、かなりのわがままも許してもらうことができた。写真や調査研究の仕事などが思うようにできたのも、こうした事情があったことにもよる。

その間にとった『かいこの村』や『一年生』などの写真はさいわい岩波写真文庫にもとりあげられ、三冊出版してもらうことができた。そのほか一軒の農家に一か年間毎日かよってとった写真と記録の一部は、『農家の四季』として、昭和三十六年に家の光協会から出版してもらった。また外地から引き揚げて、不利な条件のもとで開墾をして、農業をはじめた人々の生活を知ろうとして郡内の開拓地をまわり歩いた。

写真をとったり調査をするのも要は教育のためで、こどもたちの教育をおろそかにしてはならないと思った。ことにこどもも親も村にいては教師を自ら選ぶことができないので、担任になったからには、自分のもつ力を十分に生かして、こどもにあたらなければ申しわけないと思った。それで若い仲間にも負けないつもりでがんばった。

各学校に村出身の教師が一人いることはなにかにつけて好都合で、わたしがその役をはたそうと思い、母校には十一年間勤めた。でもあまりながくいすわることは、これまたよくないと考えて、昭和三十五年、合併した同村の伍和小学校へ移った。この地区も知った人たちが多かった。

教育については、こどもたちの学科の成績をあげることはもちろんたいせつであるが、あまりに学科の成績ばかりにこだわりすぎるのは思わしくないと思った。一年生を受け持ったときなどは、夏休み中こどもに「勉強せよ」と、一言もいわないでほしいと母親に頼んだこともあった。ときには教科書もノートも学校に置いて、手ぶらで通学させたこともあった。

そのかわりできるだけ、おのおののこどものよいところを見いだそうとつとめたり、たのしみながらからだを鍛えるようなことも考えてみた。できるだけ自然にも親しませたいとも思った。

昭和四十一年三月退職するまで、これという成果もあげえなかったが、ほとんど病気らしい病気もせず、常にこどもといっしょに暮らすことができたのはうれしかった。これからは郷土伊那谷を主題にした本をつくりながら、教えたこどもたちの成長を静かに見守っていきたい。

写真先生三十年

写らなかった写真

近くの山の村に、友人が教員をしている。その村で、仕掛け花火を打ちあげる祭りがあるというので、二人の友人といっしょに見物に出かけた。

わたしは、知っている写真館から小型カメラを借りていった。昼間のうちに、どこかで記念写真をとろうかということになった。

一人の友人が、知った顔ばかり並べても芸のないはなしだから、だれか村の娘さんでも頼んでいっしょに写してみないかといった。

それはおもしろいと、教員をしている友人に

頼んで娘さんを物色してもらったが、皆いやだと断わられてしまった。

今ならなんでもないことかもしれないが、三十余年も前の、しかも山の村とあってみれば無理もない。

でもせっかくの案をあきらめるのも残念と、めぼしをつけた娘さんがいやがるのを、先生の友人たちで別にあやしい者ではないからと、むりやりに頼んだ。

場所は寺の境内がいいというわけで、つり鐘堂のそばで写すことになった。あれこれ人物の配置などを考え、距離や絞りにも気をつけて、場所をかえ二、三枚シャッターをきった。今のようにパチパチとふんだんにとることはできなかった。写真ができたら届けることを約束して別れた。

キャビネの組み立てをかついで

その夜は花火を見物して、友人の下宿に泊めてもらった。次の日、家に帰ってから、カメラを借りた写真館にそのフィルムの現像を頼んだ。

二、三日たって、結果はどうかと胸おどらせて、写真館を訪ねてみた。すると、店の主人がきのどくがって、十分気をつけて現像したが、どうにもうまくいかなかった、それに、ファインダーののぞき方がどうかしていたのか、顔がはずれている人もいるとのことで、原版を見せてくれた。

原版をよく見るとピントもあまいし、娘さんを入れた記念写真も、友人が一人どうにかはいっているだけで、かんじんの娘さんは額のあたりから切れている。一人の友人は全然顔が見えない。さんざんな写真だった。

あんなにしつっこく頼んでおいて、こんな写真はとても送ってやることができない。友人たちからも、写真はどうだったかと問い合わせがあった。いまさらどうしようもないので、ひらあやまりにあやまった。娘さんたちには、教員をしている友人にわけを話してあやまってもらった。友人たちから「熊谷の写真は、写ると思ったらおおまちがいだ」と、いわれた。

その次の夏、例の友人たちと近くにある富士見台という高原に登り、山の向こうの島崎藤村のふるさと馬籠(まごめ)を訪ねることになった。

こんどは、また別のカメラを借りていった。富士見台で、連れていった伝書ばとをはなすというので、カメラを向けた。友人はなんともいわなかった。前回の面目をとりもどしてやろうと思っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c